

# 魯文の艶本

高木 元

要旨 仮名垣魯文に関する研究は『安愚楽鍋』や『西洋道中膝栗毛』など著名なテキストを除いて著しく遅れていた。この数年間、国文研で組織された魯文研究会に参加した方々の努力に拠って、魯文の文筆活動の全貌が明らかにされつつある。ところが、習作期に多作していた艶本については、その所在情報の入手が困難であったこともあり、その全体像は必ずしも見えていない。本稿では管見に入った艶本資料に拠り、作家としての出発をした鈍亭時代の魯文の文筆活動の一端を明らかにしてみたい。



魯文が若い時分から山東京伝や曲亭馬琴など戯作者に憧憬していたことは知られている。嘉永二年（一八四九）春に出した戯号「和堂瓊海改め 英魯文」披露のための所謂「名弘め配り本」である『名聞面赤本』に「魯文幼なかりし時、艸双紙の終の圖の、机に掛りし作者の真似して遊びたりしに、今また作者たらん事をのぞむ」との記述が見られ、この逸話もそれなりに実情を示唆したものととの想像に難くない。同書の末尾には、自ら卑下して「僕が継ぎ接ぎする狂文の、銚仕事に古着の趣向を洗ひ張して、戯作者の手前符牒をつけんとして、英魯文、赤本の桃ならなくに我は又洗濯もの、名や流すらん」と記しているが、この言説に見られる「継ぎ接ぎ」「銚仕事」「古着の洗ひ張り」「洗濯もの」などという表現は、既に評判になっていた作品に基づいて書く、創意工夫のない安直な抄出縮約を意味している。

これらの表現は、後の切附本の序文に頻出する「糟粕」と同義で、例えば、嘉永七年の切附本『八百屋於七小姓吉三當世娘評判記』に「事物糟粕、赤本の桃ならなくにわれはまた洗濯もの、名や流すらん、鈍亭」とある。<sup>(3)</sup> 安政二年『雙孝美談曾我物語』には「古人の糟粕をねぶりて、以て一口をぬらす而已」、さらに安政三年『英名八犬士』第八輯結局には「稿成名を賣僻作者。古人の糟粕を囫圇に口を粘する門辺の瘦犬」、安政四年『釋迦御一代記』初編には「他の見識ある著述家なりせば。糟粕の譏りを愧て。屢是を推辞べきに。余は元來蛇足に臆せぬ。文盲不学の白癡なれば。世の胡慮となるを思はず。速に毫をとつて」と開き直り、万延元年の『拔翠三國誌』第六輯に至っては、序末の戯名を「糟粕外史」などと署名している。

つまり、魯文は文壇デビュー当初から習作期を通じて〈嘗ての著名な戯作者の糟粕を嘗めるに過ぎない戯作者の端くれ〉という極端に自己卑下した立場を標榜し続けていたのである。しかし、安政二年『蝦夷錦源氏直垂』前編には「近頃物の本とし言ば。古人の糟粕ならざるはなし。こゝもまた時運に依るところ。拙とのみ言べからず。況て兒戲の策子をや。吾亦ふかく懸念せず。」とあり、伝統的な戯作者の口吻である「口に糊するためにする著述で所詮婦女子の慰みものだ」と謂いつつも、同時に「時運」に拠るところであるとの認識を示している。

天保の改革以降、化政期に活躍した戯作者が次々に物故してしまい「戯作者の種切れ」であるとの状況認識に就いて、例えば「才子弘化奇話」初編巻之下（弘化期、何毛呉館内）所収「地獄之奇談」<sup>(4)</sup>では、弘化二年に亡くなった栄久（書肆栄久堂山本平吉）が地獄で京伝種彦一丸春水三馬などに逢い「この節は娑婆も誠に戯作者の切れにて、先生方御引取りの後は何ひとつ本らしき物は出来申さず、偶々出来れば熱病人の讒言を言ふ様な前後乱脈の分らぬ事ばかり綴くり、その上作料ばかり欲がり候故、書肆も一統困り切て……」というところ、「我々の作を洗濯して自分共が新しく仕立し様に誇る族もあれば……」と応じている。弘化期には未だ馬琴や京山が存命中で、魯文が文壇にデビューする少し前のことではあるが、天保改革後の斯様な状況認識は魯文も「時運」として共有していたものと思われる。そもそも切附本というジャンル自体が、「讐討類、物語類、一代記物、此書は五十枚一冊読切物品々明細早分り物」（槐亭賀全「松井多見次郎報讐記」の巻末広告、吉田屋文三郎板）とあるように、弘化期以降とりわけ嘉永安政期を中心に粗製濫造された廉価な小冊子で、実録や浄瑠璃、読本や合巻などの抄出縮約を目的としたものである<sup>(5)</sup>。さらに、「糟粕」と「抄出」という方法こそが不可欠な切附本というジャンルを主導したのが魯文であつてみれば、その序文などで繰り返される自嘲的に卑下した口吻を文字通り受け取るわけにはいかない。

ところで、習作期の魯文が生活と売名とのために、様々なジャンルに何でも書いていたことが次第に明らかになつ

てきているが、見逃すことのない一ジャンルに艶本<sup>えほん</sup>がある。艶本は普遍的な需要が存しているにも拘わらず、何時の時代にあつても、風紀上の理由から表向きには非合法化される特殊な商品ではあつた。しかし、その故に、多少のリスクは背負うものの、板元にとつても執筆者や画工にとつても、実際のところ実入りの良い仕事であつた筈である。

艶本に就いては、早くから林美一氏の先駆的な研究が備わつており、<sup>(7)</sup>それなりの蓄積はあるのだが、隠微な古書資料であり続けたことから、近年に至るまで公的機関の蒐集は多くなく、結果的に所在の知れている本は少ない。<sup>(8)</sup>このような事情から、魯文の艶本に関しても全貌は未確認ではあるが、本稿では管見に入つた資料の報告を通じて習作期の活動の一端を明らかにしたいと思う。

魯文が手を染めたと思しき艶本に用いている戲号は「慕々山人」が多く、その他「妻恋淫士」「當書山人」「當垣慕文」などがあるが、「恋岱」を冠していることから湯島妻恋坂に住んで「鈍亭」と号していた習作期、つまり嘉永末年（安政元年）から安政末年に、切附本の板元として馴染みの深い品川屋などから、この種の非合法出版物を多く出して原稿料を稼いでいたものと思われる。

その特徴は、絵を見ることに中心のある草双紙を摸した春画本ではなく、所謂「読和」と呼ばれる読本風の「読むこと」に主体のある絵入本を書いていることである。また、魯文の艶本は『三国志』や『修紫田舎源氏』など、何等かの先行する著名な作品を典拠として改作したものが多い。この特色は「抄録家」としての魯文の面目躍如であつた。

魯文が「糟粕」を標榜していた習作期に艶本に手を染めたのも、方法的には切附本などと大きな相違はなかつたからであろう。ただ、単なる抄出ではなく艶本として改作するには、求められる性的雰囲気醸し出すための語彙

を宛字に拠って創出したり、典拠を逐語的なパロディにしたりするという戯作的なセンスをも要求されたものと思われる。この点を魯文の他作者に対する優位性として積極的に評価することも可能であると思われる。

〔注〕

(1) 国文学研究資料館所蔵本 (ヤマト) に拠る。「星窓槐葉／砂文字や野良をつくしの筆ははじめ」の詞書。なお、本書に就いては『近世列傳躰小説史』下巻(春陽堂、一八九七年)所収の野崎左文「假名垣魯文」と、林美一「江戸広告文学」坤(未刊江戸文学刊行会、一九五七年)に解題と翻刻とが備わる。

(2) 以下、本稿に於ける板本の翻字に際しては、私意に拠り適宜漢字を宛て原文を振仮名として残した上で、読点や濁点を補った。

(3) 『名聞面赤本』所収の狂歌に同じ。34ウ35オに「談笑諷諫だんせうふうかん／滑稽道場こつげいどうじやう／御詵案文著作所おんあつらへあんもんちよさくじところ／妻戀坂中程鈍亭「ろぶん」の看板と共に描かれている。以下の切附本に関する記述については拙稿「鈍亭時代の魯文―切附本をめぐる―」(『社会文化科学研究』第十一号、千葉大学大学院社会文化科学研究科、二〇〇五年九月)参照。

(4) 初編中本二冊、外題は『才子當世妙々奇談』、底本は架蔵本に拠る。拙稿「感和亭鬼武著編述書目年表稿」(『江戸読本の研究』第四章第五節、一九九五年、ペリかん社)で全文を紹介している。また、山本和明「『當世妙々奇談』―翻刻と書誌」(『相愛女子短期大学研究論集』第四十七号、二〇〇〇年)に全冊の翻刻と、同氏に拠る「叱られし人々―『當世妙々奇談』私想」(『相愛国文』第十三号、二〇〇〇年)という考証が備わる。

(5) 拙稿「末期の中本型読本―いわゆる〈切附本〉について―」(『江戸読本の研究』第二章第五節、一九九五年、ペリかん社)参照。

(6) 平成16～19年度科学研究費補助金(基盤研究B) 研究成果報告書「原典資料の調査を基礎とした仮名垣魯文の著述活動に関する総合的研究」(研究代表者 谷川恵一、二〇〇八年三月)、拙稿「魯文の売文業」(『国文学研究資料館紀要』三十四号、国文学研究資料館、二〇〇八年) など参照。

(7) 林美一『艶本江戸文学史』(河出書房、一九九二年、初出は一九六四年)、同氏『艶本江戸文学史』(河出書房、一九九一年、初出は一九六四年) など参照。

(8) 『国書総目録』には「日本艶本目録(未定稿)による」として、所蔵の記されていない艶本の書名が頻出する。近年、白倉敬彦氏の労作である『絵入春画艶本目録』(平凡社、二〇〇七年)が出た。図版を豊富に掲載した貴重な資料ではあるが、「春画艶本目録」の完成を目指して公開をしたと序文にあるにも拘わらず、実際の書目には所蔵が記されていないので、例えば改題本を調査しようとしても追認確認する方法がない。春画や艶本は個人蔵に帰したものが多く、個人的な名前を公表したくないという事情が存することも想像に難くないが、立命館大学アートリサーチセンターに所蔵された故林美一氏のコレクションや、国際日本文化研究センター蔵の艶本資料などは既にインターネット上に画像データが公開されており、やはり学問の進捗のためには可能な限り所蔵を記すべきだと愚考し、本稿では知り得た全ての所蔵機関(者)名を明記した。

二 魯文艶本書目 (稿)

- 横瀬音海よこせのねうみ 假枕浮名仇波かりまくらうきなのおだなみ  
向真與謝 向真與謝むかまるとしや
- 風俗讀極志 初〜三編  
ふうぞくどくしや
- 星月夜吾妻源氏 初編  
ほしづきよあづまげんじ
- 淫編深閨梅前後輯  
いんへんしんけいばい
- 佐勢身八開傳 前〜三集  
させみはつかいでん
- 単染春の色糸 初編  
なつみそめはるいろいと
- 木曾七旅寐廻手枕  
きよぞうしちりべのたまくら  
開道
- 戀心の涙露の出島  
こいしのみなとなきけ でしま
- 於七封文戀情紋 初編  
おちつかうじぶみひのじやもん
- 仇恋端唄の忍音  
あだなこいはいはうた  
しのびね
- 春色湊入婦禰 初編  
しゆんしやくみなとりのりかね
- 半三冊 慕々山人 嘉永七年刊カ (国文研〈ナ4-755〉・日文研<sup>(9)</sup>〈KC172Bo〉)
- 中三冊 慕々山人 安政二刊カ (BnF Richelieu EST/Paris 〈Dd3031-3033〉)
- 中一冊 慕々山人 安政三年春(序) (愛知県立大〈市橋文庫四三三〉・高木)
- 中二冊 慕々山人 安政三〜四年刊 (国文研〈ナ4-809〉・後〈ナ4-811〉・立命館ARC)
- 中三冊 慕々山人 安政三〜四年刊 (内田・服部・高木・国文研(三欠)〈ナ4-683-1〜2〉・  
 (上)〈ナ3-114-4〉)
- 中三冊 慕朴齋 安政四年刊 (国文研〈ナ4-801〉・立命館ARC)
- 中一冊 妻恋淫士 安政四刊 (山本)
- 中一冊 當書山人(序) 安政六刊 (BnF Richelieu MSO/Paris 〈Japonais 211B〉・未見)<sup>(10)</sup>
- 中一冊 慕々山人 安政頃 (立命館ARC)
- 中一冊 當垣慕文(序)・色念人娘壺述 婦多川清水 (立命館ARC)
- 中一冊 大珍坊阿奈垣主人 一廣開飯盛(画) 安政頃刊 (ホノルル美術館)



以下の△は所在不明「日本艶本目録（未定稿）」などに拠る。

△國盡戀路芝くにづくしこいのみちじは

一冊

△春色優源氏しゅんしよくやうげんじ

一冊

慕々山人 一 交斎情水、幾丸 元治元序

△東海道驛路の鈴口

一冊

慕々山人作 松廼大木画 嘉永頃刊（改題本「東海道五十三陰門」）

△日本国づくし

一冊

妻恋の溜士／慕々山人 安政四刊（「春色江戸名所」）

他に「椿説弓張月」の艶本が存したか。

〔注〕

（9）以下、国文学研究資料館は「国文研」、国際日本文化研究センター艶本資料コレクションは「日文研」と略す。

また、フランス国立図書館（旧館）は「BnF Richelieu/Paris」ESTは版画室、MSOは東洋写本室、立命館大学アートリサーチセンターは「立命館ARC」と略す。

（10）『欧州所在日本古書総合目録』に拠ればロシア国立図書館（サンクト・ペテルブルグ）に所蔵されているという。

「外題と内題「恋の港露の出島」、中一冊、「安政六刊」、無刊記、艶本、序文「恋のみなと／露の出しま序／……／ひつじの新板 当書山人」、Yap.NS.59」

### 三 序文と解題

横櫛音海  
假枕浮名仇波 初編  
向疵與謝

#### 仮枕浮名の仇波

西施の乳と揮号る魚は、味美なれども得て毒あり。一口もの鉄炮汁に、顔を焦す居膳の、辞退をせざるは男子の平常にて、我妻ならぬ翰喰は、重きがうへの筑川の鍋焼。河豚なうらみぞ小夜衣よさぬる夜半の肉布團、其暖味に打込では、雪の夕の寒を覚す。片肌脱で黥刺の腕の命を忘るに至れり。嗚呼魔哉陰門玉戸と一個歎じて項を發る。陰莖の天窓をはるの夜の「枕草紙の趣向として、一本かいた禿毫、帽のま、なる皮被、原の脚色さへしら濱の、その仇浪を題号となし、たつや浮名の世説は、彼與三郎が陽物を、挟まんこ、ろの汐干狩、蟹の歩行の横櫛音海が、かはく間もなき下紐を、解てしつぼり濡事に、あれさいく夜の淫樂も、忽ちかはる修羅道場、劔の山に向ふ疵、きつても切れぬ合恍惚は、刺ども盡ぬ悪縁にして、入れたたんへが抜かりよかのんし。中興流行し童謡は、二個が痴情によくかなへり」遮莫迷ひの雲晴れば、真如の月も明らかに、照すそ則煩悩菩提、毒藥変じてくすりとなる、作者が筆の匙加減、烏犀角を藥研でおろす、形容に似寄の交合圖に、配劑なしし小工摺の、彩色美備敷製たれば、微は氣の生効驗もあらんと安本丹の可道を、能書めかして誌になむ

睦月ひ女始の夕

のり初の枕下に

戀岱溜土

慕々山人伏裏「印」(上巻頭)

○作者机上に毫を休めて、看官の好色諸君へ伏裏。抑爰に綴りなす溜本三巻は、専らお富が与三郎が、痴情の成行を、微小にても述さでは、物語の趣意を失ふなれば、巻毎の本末には、溜事に拘らぬ文も多かり。譬は繪と溜詞は花と実のごとく、前文筋書は葉のごとし。溜本の老實なるは、傾城に女今川の、講釈して聞せるやうにて、卯月の櫻ながめ榮せず。此理を知る物から、成丈短文で此回著す。於富が海に没後、不思議に命を全ふし、與三郎が疵愈て、再び荏土に伶得ことなどは、三年往時三回目の溜事店の妾宅にて、二個がはからず巡會、その時の問答詞にて知り玉へと、念の為識すになん

東都戀情本一家元祖

慕々山人再識「印」(中巻末)

※半紙本三巻三冊。二代目婦喜用又平画。凝った表紙の意匠で見返、序の背景や口絵と全ての挿絵にまで色摺が施され、上中巻の口絵は折り込みになっていて広げると倍の中になる。本文は根本風で会話を交えた仮名漢字混じり。中巻の冒頭には歌沢節を書体を替えて引用している。金色まで用いており、以下挙げる中本サイズの艶本とは別格

の豪華な本である。内容は題名からも容易に推測可能であるが、『與話情浮名横櫛』（嘉永六年、中村座初演）の作り替  
えで、嘉永七年刊か。林美一『江戸枕絵の謎』で一部分が引用紹介されており、福田和彦編『仮枕浮名の仇波』（浮  
世絵グラフィック7、KKベストセラーズ、一九九二年）に不完全ながら翻刻されている。

◆風俗讀極志 初編

序詞

此頃いたう降續く、春雨の徒然なる儘に、ほころぶ梅の薰りゆかしく、我妻戀の溜居所なる。南窓うちひらき、  
庭の外面を見やる折しも、「垣をつたふ蚰蜒の、其形指に似たるを、腹筋陰門の如き蝦蟇の大きやかなるが床下  
より歩みより、口を開て吞んとするに、傍の植込の影よりも、頭は陰莖に髻髻たる、青蛇と欬するへびのず  
るく」と這出つ。彼開蝦蟇を襲はんさまにて、吐溜に等しき氣を吐かくるに、此時迫もすくみぬし蚰蜒は前に  
進み、二虫の間を隔るに青大蛇は是に怖れ頭を縮めて後辞去、一進一退ひよこくのろくぬらくとして白眼  
あひ」埋座たる三際、漢土呉魏蜀三ツの國なる三個等しき英雄の戦争にしも異ならずと、妄想に視じ三蟲  
の異なる秋のいとおかしく、是ぞ趣向の種本と思ひ机に筆を発動し通俗演義基礎とし、例の溜書に綴らばやと  
初編一稿脱し畢り數員を重ねて股庫を潤さんとの計策なりしが三國志の齟齬だけに、三輯位で氣をやれよと  
梓主よりの注文に、残りをしさも弥増て、編足らぬながら入話は、腎虚の種と思ふもの」から、ぐつと引抜  
原書の脚色、その筋張た大物と、競ものには奈良漬の、最糟臭き皮かむり、たんのうするほど行届ぬは、青い

猴児こせうの蕃椒とうがらし、珍銚ちんほこだけと見ゆるし給へ

腹太鼓はらだいこうつ初午はつうまごろろ大きな御利生ごりしやうを突張つばりながら妻戀つまこひの溜士いんしらんてい乱亭らんていのあるじ

慕々散人戯述 ◇

◆ 風俗讚極志二編

風俗讚極志第二編

謀計めいけいを惟幕みぼくの中にめぐらし、勝利かちを千里せんりの外ほかにしらすは名将めいやう勇士ゆうしの常つねにして、交合さうごうことを蒲団ふとんの上うへに行おこなひ、鼻息はないきを屏風へうふの外そとに洩もちすは、戀情れんじやう淫事いんじの持もちまへなり。されば傾國けいこくの一婦人いつふじんには、百万ひやくまんの大敵たいてきも舌したを卷まき羅刀らたうのなりの向ふ疵きずに、鎗先やうきさきの功名こうめい駈かけを争あらしひ、雨あめの箭頭やさきに雲くもの楯たて、入乱いりみだれたる鬪戰たうかひには死しよくの声こゑかまびすし。そも春画わらひゑは軍用ぐんようの「最さい第一だいいちとなせる物ものにて具足ぐそくの櫃ひつに入置事いれおこな戰場せんじやうに望敵ぼうてきをたいらけ勝利しょうり掃陣さうじんの砌みきりといふとも、勇氣ゆうき自然しぜんに叛まか上のりの和やはらくこと能あたはされは、明日あすの進退しんたい自在じざいを得えず、依よりて春画しゆんゑを披ひらき見みればいかなる猛たけき武士ぶしも、心こゝろ和やはらき笑あはれを含かくむは、実じつに春画しゆんゑの徳とくにして、わらひ繪ゑの名なも空むなしからすと淫時いんじの乱らんをわすれぬ為ため。治世ちせいの今いまの萬々ばんくぜい歳さいまで、此こゝことわりを傳つたへんと、かき綴つづりたり讚極志さんごくしを六韜りくたう三略さんりやく虎この巻まきとも、愛めでたまはらば作者さくやの「面目めんぼく、妻なまたる陰莖いんぎを起おこすに至いたらん

寒風かんふう祛さつて春心しゆんしん揺動うごめく睦月むつまつきの下句すへつかた野交庵やかうあんの南窓なんさうに猫ねこの交合さかひを見る日ひ

東都妻戀とうとつまこひ溜士いんし／慕々山人戯誌「印」「亂亭」呂文りふぶん

◆風俗讚極志三編

風俗讚極誌第三編 結局序

浮屠氏も誓扶習生なければ、八相成道の化儀調はず、凡夫も戀慕愛別なくては、男女和合の情を失ふ。夫色欲は真如の導き、煩惱則ち菩提の種と、爰等を脚色の柱礎とし、讚佛乘の因縁から、此讚極誌を綴りなし、陰莖の頭を筆頭に、換て白癡を盡し、が、三輯にして氣を洩せり。かゝる溜史の中にしも、勸懲の意を失はざるは、余が筆力の妙にして、「作者の用心爰にあり。嗚呼談何ぞ容易ならぬ、一切衆生の根本たる、彼玉門の尊き味を、知らて譏る野暮ありとも更に絲瓜の皮とも思はず、まらかしやアがると嘲る而已

于時卯月上旬、隣家の喜悅聲を蜀魂の、初音と交へて聞夜辺、妻戀の溜室に局を結て

天上天下唯我獨身の寡漢、慕々山人戲題 ◇〔印〕

※中本三編三冊。立通亭茶之子画、表紙・見返・序の背景・口絵には色摺が施されている。二編十二丁裏の挿絵中に描かれた手拭いに「岳亭」と思しき印があるので、画工は二代目の岳亭か。また、後ろ表紙には品川屋久助板と同じ意匠を用いているので、板元は品川屋かと推測される。

『三国志演義』に基づく作り替えであるが、「風俗」は「通俗」を利かせているようであるから、池田東雛亭「繪本通俗三國志」（天保七、十二年）を粉本としているのであろう。各編に付けられた章節の小見出しは次のようにある。

初編

- こんな赤繩あにしが唐模様からもようしつぽく料理すえんの居膳いぜんは桃園亭もいせのていの酒宴もり
- 煩惱ぼんのうの犬いぬもあるけば開ひらに當あたる犯くわひかせぎの仕し度師と
- 大陰莖おほまらと廣開ひろつひの取組とくみは百手ももてを碎くだいて揉合もみあた戀角力こひすもふ
- 尻尾しつぽを出だした女狐めぎつねが再ふたび化ばけた金毛きんもう白面はくめんの化粧部屋みじまひべや
- 手管くだのわなと毛深あない陰門あなへ落おちかゝつた魏國屋きくにやの主人たいせう

二編

- 又またこりずまの開盜人まめどろぼうは虎穴こけつに入いつて虎兒得こじをうる英雄あゐゆうの謀計はかりごと
- 乗のりて見みたい腹櫓はらぐら赤繩あにしの横綱よこづなひつぱつた伊達娘だてむすめ
- 大若衆おほわかしゆが新開あらばちわるで氣きざしてきたと古開ふるばちは小若衆こわかしゆの間に合あせ
- 人を咒のろはゞ二ツの陰門あなに落おちかゝつた妾宅せうたくの悪わるたくみ

三編

- 樂屋新道がくやしんみちのごた付にせまらつかは偽男根遣らんぼうらうせきひが乱妨狼藉らんぼうらうせき
- 炬燒こたつの中なのころび寐ねは雪ゆきおろしの積つもる睦言むつこと
- 其二そのに雪見ゆきみにころんで只ただは起おきぬ新開あらばちの佳肴ごち珍味せう
- 太鼓たいこの抜ぬけは見みぬふりをした密夫みつふの返報へんほう

○息子の淫念をはらさせたいが開一ばいの後家の密會

○三方納る床の中は第三編の讀極秘

例に拠つて登場人物名なども典拠に基づいて艶本に相応しく直しており、「魏國屋宗兵衛」、町唄女樂屋新道の「阿蟬」、黄金屋の遊女「角万人」、始穴氣橋の唄女「姐已の阿多魔」、黒江屋徳三郎（排名「柳眉」）、徳三郎の妻「阿甘」、一子「阿斗松」、徳三郎の妹「於兔馬」、黒江屋の手代「李助」、角力取「雲の戸関之助」、深草奥山の茶店女「櫻木の於香」、呉服屋孫右衛門の二男「権之助」、太鼓医者「太井陰莖」、俳諧師「臥龍菴諸葛」、諸葛妾「於智恵」、妹「於琴」、呉服屋の後家「於乱」、落語家「野面溜樂」、鶯の者「燕の張吉」、という具合である。

### ◆星月夜吾妻源氏初編

星月夜吾妻源氏 初編序詞

紫姫、五十四帖の翠簾紙を費して、張形に情をうつし、佐称彦指に筆を勞して、當書に人を喜悅。夫は官女が閨房の徒然、是は裨家の机上の洒落、都と田舎の差別はあれど、恣に貴賤の隔はなく、交合に異ることやはあらめ。玉門色界、開珍宝。されば浮氣の春曙一刻、價千金をなげうつも、悉皆男根の業物にて、すつてんてれつく天狗面の、龜頭を持上るおかげ「ならずや。一度怒りを發すれば、ふしくれ立て筋張たる、紫色の由縁から、思ひつくえに、皮かぶりの、椎の実筆の鞆をはづして、又かきかける故人の真似彦。其流躰に、いさ、



かちなみて、西の世界を東へ移し、吾妻源氏の時代世話、光る君にはふさはしき、雲井に輝く星月夜、鎌倉山を東山と、や、附會た一夜漬。心余りて言葉足ぬは、出合に等しき寸の間なれば、人の来ぬ間にさつくと、初編一部とぼしたばかりで、ろくに氣のいく事さへ知らず。まだ贅も青蕃椒珍宝亭の南椽なる、溜水の流をたのし、毛深き処に採毫。

于時男根／たつの年／春心發動の吉旦

吾妻恋しとの給ひたる／舊跡に住る溜し

慕々山人記「枕」(巻頭)

巻末に次のようにある(読点を補った)。

○星月夜吾妻源氏初編二編三編  
不残大尾出板

修紫に由縁をもとめし時代模様の鎌倉御所、源家三世の溜楽得失、武ばつた中の閨房婚談、編を継巻を重ねて、追々發市の桜木に、花を咲する作者の腹稿、迷々色里、春情奇縁、輝く君になぞらへたる、好色漢の所行を見ると欲する官看は、且下回の分解を聴

板元 溜葦堂敬白(51ウ)

※序末に「于時男根たつの年春心發動の吉旦」とある。この手の艶本は安政期に多く手掛けていることから、安

政の辰年と判断し安政三年刊と推定した。中本一冊。架蔵本の後ろ表紙は後補。同板の愛知県立大学市橋文庫本は表紙を欠くが、後ろ表紙は源氏香の意匠を施す原表紙と思われる。見返・序文の背景・口絵にのみ水色などが使われている。二編以下未見。

柳亭種彦の合巻『修紫田舎源氏』（初二編）を翻案したもの。表紙の意匠や口絵・挿絵なども典拠の面影を写している。表紙は白地に黄と褐色の小片を金砂子風に多数散らし、さらに空摺りで無数の横皺を施して檀紙の風趣に擬えているが、これは『修紫田舎源氏』のシリーズで採用された表紙の意匠である。本作は、まったくこれを模倣したもので、『修紫』二編上冊に描かれた藤の方に摸した女性の立ち姿となっている。また、見返にあしらわれた藤の枝と石山硯（石山寺源氏の間置かれた紫式部使用という寺宝の硯）も、『修紫』の仮託作者「阿藤」の名に因んだものと思しく、硯は『修紫』初編上冊の見返の意匠を踏まえたもの。

口絵第一図は「源頼朝公」と「頼朝愛妾朝霧」とを描き、「長恨歌／春宵苦短日高起」と賛を入れる。これは『修紫』初編上冊の口絵（三ウ四オ）「桐壺の帝」「桐壺の更衣」の姿をそのまま模写したもので、ご丁寧に「長恨歌」も同様に賛として用いている。口絵第二図は衝立を隔てた「頼朝別室富士方」と「源實朝公」と描くが、これも『修紫』二編上冊の口絵（壹ウ二オ）「足利義正の別室藤の方／藤壺の宮に比ひ」「足利次郎光氏／光君に比ひ」の姿を写したものである。

挿絵も『修紫』を利用したものが多く、特に「内室政子前黒糸と密話／同人丸社の場」（三十六ウ三十七オ）は、『修紫』二編の挿絵（十二ウ十三オ）と（十三ウ十四オ）とを、折り返した意匠で一図にまとめたものである。斯様な工夫は本作に始まったものではなく前例もあるが、やはり凝った趣向だと云えよう。さらに手が込んでいるのは、対応する登場人物の着ている着物の意匠を『修紫』と同様にしてあるので、政子は「富とよ徽の前（弘徽殿女御）」、「富士

の方は〔藤の方（藤壺）〕、源頼朝は〔足利義正（桐壺帝）〕、朝霧は〔花桐（桐壺更衣）〕、源実朝は〔足利光氏（光君）〕、夕顔は〔昼顔（後涼殿更衣）〕という対応関係は明瞭である。これは侍女などにまで及び、黒糸は〔色系〕、松ヶ枝は〔杉生〕、黄菊は〔小菊〕、銀杏（刈茅）は〔桔梗（刈萱）〕という具合である。

さて本文に關しても同様にほほ『修紫』に拠つていて、本作の人丸社での忍び会いの場面では

○跡ハ松風ふきそひて御燈の光りかけ薄くいとしんくたる社のうち戸帳か、げて立出る実朝ほつとばかりに吐息つきへかくれ遊びに思はずもいちく聞とる館の大事きのふふしきに黒糸が落せし文をひろいしも日頃信ずる神の徳エ、かたじけなやありがたやトふしおがみつ、懐より手遊の笛取出し合図とおほしくふきならせ子供をもつれずふじの方築山の細道をめぐりてあたりを伺ひくへ実朝さまさいせんのおふみゆゑいかなる事かと氣づかわしくさいぜん植ごみに身をひそめへサアおまちどうをバさつしながらいよくくわさうにせまつた大事へヤへイヤだいいないわたしのそばへおよりあそばせいまめかしい事ながら此実朝をしん実にかわゆうあなたハおぼしめすかへア此子としたことが人の居ぬ其時ハわたしも実ハ子のあしらひおまへとても心切に母よくとしたうものいとしうなうてなんとせうへさやうならわたくしがいたゞきたいものがあるへヲ、なんなりとあげうはいなへほかでもないお命を下さりませと抜はなす白刃の下を動もやらずへハテ死ねなら死にもせうマアさわがずとわけをしづかにいうたがよひへハ、アあつばれのおんたましいそのお心にほれましただかれて寐て下さりませサ、おどろきハ御もつとも親に不義をしかくるからハ生きていぬのハ元より覚悟お命を下されと申たのハ若此戀がかなはぬ時ハもろともにトよりそひ給へバふじの方につこりと打笑給ひへ世界に女もないやうに道にそむいてわらはへ戀慕なんぞこれにハふかいやうすがへサアそのことハあからさま

にハどうも今ハまうされぬ心の丈を文にかきそつとおわたしませう。何から何までも利はつなお子じやと日頃からおもひがけなく今宵の仕義わたしも朝夕そなたの事ハとひつたりとよりそへバ思ふて下さりましたかエ、おうれしうござりますとしがみついでいただきしめ顔見合せて口口チウくくトしばらくすいて実朝ハふじの方のいもじをかき分……

という次第で濡れ場へ続くわけであるが『修紫田舎源氏』の該当箇所（第二編下冊、十四ウ十五オ）は、

後は松風吹き添ひて、御灯の光影うすく、いと深くたる社の内、斗帳か、げて立ち出る光氏、ほつとばかりに吐息をつき、「隠れ遊びに思はずも、いよく聞きとる館の大事。昨日不思議に白糸が、落せし文を拾ひしも、日頃信ずる神の徳、あらかたじけなや有難や」ト、伏し拝みつ、懐より、手遊びの笛とり出し、合図と思しき吹き鳴らせば、供をも連れず藤の方、築山の細道を、めぐりて辺りを窺ひ、「光氏様、笛の音を聞いたなら人に知らさず此社へ、忍んで来よとのお捻り文、袂へ入れ給ひしゆゑ、いかなる事かと氣遣はしく、最前より泉水の、土橋を渡り身を潜め」ト、御待遠をば察しながら、いよく火急に迫つた大事。「や」「いや大事ない私の、そばへお寄りあそばしませ。今めかしきことながら、此光氏を真実に、可愛うあなたは思し召すか」「あの此子としたことが、人の居ぬその時は、わたしも実の子のあしらひ、そなたとても親切に、母よくと慕ふもの、愛しうなうて何とせう」「左様なら私が、頂きたい物がある」「ヲ、何なりとやらうわいな」「ほかでもない、お命を下さりませ」ト、抜き放す、自刃の下を動きもやらず、「はて死ぬならば死にもせう、仰山に騒がずと、訳を静かに言ふがよい」「は、ア、さすが祖父の御血筋、あつぱれの御魂そのお心に惚れました抱かれ

て寝て下さりませ。さ、さ、驚きは御もつとも、親に不義を仕掛くるからは、生きておぬのは元より覚悟。お命を下されと申したのは此恋が、叶はぬ時はもろともに」ト、寄り添ひ給へば藤の方、につこりとうち笑み給ひ、「世界に女もないやうに、道に背いて妾へ恋慕、何ぞこれには深い様子か」「その事はあからさまに、どうも今は申されぬ、心の丈を文に書き、そつとお渡し申しませう。なるほどこれでは尤もぢやと、思し召したら明日の夜は」「忍んで来やれ、会ふてやらう」ト、のたまふ後に聞きゐる杉生、袖に隠せし雪洞を、差し出す火影に見合はす顔、はつと驚き差添の、刀背にて光氏雪洞を、そのま、はたと打ち落とす、弾みに袂をこぼる、密書、杉生手早に拾ひとる、途端に山名の忍びの者、組まんと寄るを藤の方、ひらりと外して突きやるを、取つて押へて光氏が、ぐつと突つこむ氷の刃、うんとも言はず忍びの者、そのま、そこに倒れ伏す。言葉はなくて三人は、別れくになりけり。

〔新日本古典文学大系〕に拠る)

というように、基本的には『修紫』の本文(仮名ばかり)を適宜省略しつつ引用して漢字を宛てて書き直している。話の運びには適宜濡れ場を挿入している以外、ほぼ『修紫』を踏襲しているが、例えば車争いに擬した章段などは全く省かれている。

なお、『修紫田舎源氏』が多く艶本化された素材であることは、林美一『秘版源氏絵』(緑園書房、一九六五年)などを参照のこと。

◆ 佐勢美八開仕 初編

佐勢美八開傳前編叙

前に曲取主人、狗國の犬交合の古事を、皇朝の摸に横領して、一部の淫書を綴りなせり。そが脚色や里見氏の淫縁淫果其子に報ひ、彼佐勢姫が名詮自性、赤繩の絲に繋ぎ合せし、女悦道具のりん玉、數も八百煩惱の犬にひかれて足曳の、富山の奥のその奥の、ぐつとおくまで押込れ、アレモウどふもの喜悅声、人畜有非の隔はあれど陽陰の情かわる事なく、替らぬ女夫の洞住居、その氣を受けて八の子を、身に宿したる珍説奇話を、其儘生捕居茶臼の本手を礎に淫犯かくるは、例の自己が好色の道。まだ淫本の發端ゆゑ開場は少しかたけれど、二編目あたりは和々とい塩梅に淫場のしうち、村雨丸の業物を、鞆をはづして打ふる信乃濱路が受身にびつしよりと、おほひかゝりし吐淫の水氣、こつてりとした所まで追々お眼に觸ますれば、御退屈なく御覽」の程を氣が幾重にも希ふと、夜職の閨の屏風の中から口序めかして述るものは

東都淫情本一家元祖／妻戀淫士野交庵主人

草木も芽出す／氣さらぎの頃／びん／毫をおやかして

慕々山人／乱亭伊呂文／◇「印」

◆ 佐勢身八開傳 二編

佐勢美八開傳第二編序

◆ 佐勢身八開傳三編

八開傳端像序詞

いろこの  
色好まざらむおのこは玉の杯底なしとならひが丘の木の端はいへりける実には遠くて近きは此道の中らひに  
て楽しく嬉しきもまた男女の契りぞかし余其むつひことのさまを清女が筆のすさびには似るへうもあらざめ  
れど枕さうしてふ冊にもものし且今様の繪さへくわえて四方の好人にさつくるもならびか丘の枕ならへし雛形に  
もならざめやとの婆ころにぞ有ける斯いふは色の道に底抜と呼ばれぬる妻戀の溜士

閨臯月季句

慕々散人戯記◇

大溜は交合に陰ると、老子の妙言宜なるかな。余が姪朋慕々山人、曾て東都の戀ヶ岡に、野合庵てふ溜室を  
かまえ、彼風來が痿隱の溜逸傳を礎として、此發頭傳を綴りなせり。そが文章の溜微あるや、外色欲の愛情を  
ちらばの、内發菩提の勸懲をこめり。抑、式部が源氏物語、李卓吾が金瓶梅の如き、和漢一對の溜書にして、面  
に錦繡を題すれども、心に溜亂の脚色多かり。夫隠れたると現れたると、何れ欵潔白なるべきや。余は慕々先生  
をして、紫姬卓吾が筆冠たらしむ。嗚呼乱亭の一家の風調、実に戀情本の親玉と称ん。看官十把ひとからげに  
味噌と屎とを混することなかれと云云

戀俗溜士の龍陽友、外稜田の好男子、喜婦亭のあるじ、溜里しるす  
五月雨に股ぐらのびしよくしめる夕べ

※「閏臯月季句」は「安政四年閏五月下旬」。

中本三編三冊。〔安政四年刊〕二月・五月・閏五月〔序〕。「佐勢川茶子画」〔外題〔品川屋久助板〕。後ろ表紙の意匠は「五七桐紋に源氏香」〔国文研本〔三編欠〕と架蔵本の三編に残存している〕。これが「品川屋久助」が別本で用いているものであることから品川屋板であると推定される。錦絵風摺付表紙、見返と口絵とには重摺りを施す〔後印の内田本には省かれている〕。外題「佐世身八開傳〔初編・貳編・三編〕」、見返題「させみ八開傳〔初編・二編・三へん〕」、序題「佐勢身八開傳前編叙・佐勢身八開傳第二編序・八開傳端像序詞」、内題「佐勢美八開仕前集・佐勢身八開傳二編・佐勢身八開傳三編」、尾題「佐勢美八開仕前集終・佐勢身八開傳二編終・佐勢身八開傳三編大尾」と初編と二三編の間で微妙に差異が見られる。さらに、前編は一丁当り十行で、ほぼ総ルビに近い中本型読本風の板面を持つが、挿絵にも本文が入り込んでいる。一方、二編以降は一丁当り十一行で文字も小さくかなり振仮名が省かれていて切附本風の板面である。これらのことから、初編と二三編の間で出板に関する若干の方針変更が行われたものと思われる。なお、摸写した図版が入られた孔版による翻刻本が存す（禾口庵文庫蔵）。

本作は比較的丁寧な八犬伝の改作であり、登場人物名にそれらしい工夫を凝らした上で、以下の通り、原作の名場面を繋げて八犬士を全員登場させ、大団円まで筋を運んでいる。上に章題、中に登場人物名、下に場面を記してみた。

第一章 煩惱の犬櫻

第二章 若木の鎗梅

第三章 富山の白桃

里見溜婦大輔好核 佐勢姫 溜果

金勢大好鷹高 妾玉章 訥平 如是畜生春心発動

慕大和尙 りん玉

〔発端〕

〔八玉飛散〕



第四章 武蔵野の篠芒たけしやう むさしのしのすゝき 逢塚 信乃 濱路 好六 核篠 村雨丸

第五章 豊島の紫陽花としま あぢさい 犯棹二郎 子上宮六 濡手与倍二

第六章 離別の釣葱わかれ つりしおぶ 額蔵

第七章 磨羅塚の節瘤松まらづか かしこまつ 犬山道六

第八章 乱れ咲の芍薬みだざき しやくやく

第九章 交流閣の河原撫子かうりうかく かはらなでしこ 成氏 横取鷹村 犬飼現八が妹おのぶ

第十章 入江の角力取草いりえ すもじとりくさ 古那屋文五兵衛 小文吾 縫 房八 妙開

第十一章 新女山二本柳もとも 音根 曳手 一夜 莊助

第十二章 猫塚の天蓼まめ 赤岩一角 犬村角太郎 雛衣 船虫

第十三章 石濱の男郎花いしはま せとこへら 馬加日記常武 開牛楼 情野・犬坂毛野

第十四章 滑川の辻が花なめりかは つぢはな

第十五章 館山の八千代椿たてやま やちよつばき 好田権 頭素藤 妙ちん 里見好道

第十六章 八開士の閨の花はつかいし わや はな

また、八犬女についても全員の名前が挙げられており

〔濱路クドキ〕

〔円塚山〕

〔古那屋〕

〔荒芽山〕

〔庚申山〕

〔対牛楼〕

〔船虫最期〕

大江親兵衛仁	幾世姫 <small>いくよひめ</small>	犬村大角禮度	壽喜姫 <small>すきひめ</small>
犬川莊助義任	核姫 <small>さねひめ</small>	犬坂毛野胤智	都美姫 <small>つひめ</small>
犬山道節忠知	玉門姫 <small>たまどとひめ</small>	犬塚信乃戌孝	木遣姫 <small>きやりひめ</small>
犬飼現八信道	代鳥姫 <small>よがりひめ</small>	犬田小文吾悌順	小壺姫 <small>こつぼひめ</small>

という具合に成っている。また、中編の巻末に興味深い記述が見られる。

妙開ハ、さしも貞女と名をとりし賢造が、いかなる事にや、ふと小文吾を心に慕ひ、寐ても覚ても、面影の目にさへぎりてわすられず、思ひ切て云よらんと思へど、さすがとしにはち、心でころに呉見すれど、煩惱の夫去やらず、閨の灯火かきたて、貸本屋から内々で、借て置たる」<sup>29</sup> 讚極誌の溜書を、口のうちでよむうちに、例の慕々山人が筆をふるひ、画工が丹精尽したる圖どりに、おもはず心浮れ……<sup>三編下 二二九</sup>

この手の艶本が貸本屋の手を経て流通していたことは知られているが、自作の『讚極誌』の書名を挙げていることから、本作より『讚極誌』が先に出されていたものと推測出来る。

なお、近世以来、八犬伝を艶本化したテキストは多く見られ、現代になっても、鎌田敏夫『新・里見八犬伝』上(角川文庫、一九八四年)などがある。この本は角川映画の原作とは別本であるので注意(?)が必要。

◆木曾  
開道 旅寐廻手枕 (序題)

【画賛】

野狐菴賛

ねがはくは紅粉房の明鏡となつて、君が嬌面をわかたん  
ねがはくは釣衣桁の輕羅となりて君が細腰につかん  
うかれ雄の心とられし魂よそもさせるかさしの花に舞てふ

【序】

木曾 旅寐廻手枕序 「珍宝子」

邯鄲旅亭の一睡に、五十年の淫樂を極めし、盧生が夢の妄想は、枕頭片時のちよんの間にして、懇丹尽す一冊に、六十九次の度数をとりしは則ち作者が的書なり。そが道路の戯れたるや泊りとまりの旅舎に、假寐の夢のかけ流し、傀儡女の箸を採て餓たる時の腹を肥し、おしくらの醜女も、ひもじい折にまづい物なし。あるは相宿の女連に、夜這の先陣駈をあらそひ、四ツ目薬の功能には、宇治川の昔をしのび、野雪隠の立交に人目の関に鎖れて、武藏野の扉をあけよ、あな臭の、屎もこもれり、戀もこもれり、とのへらず口實にや浮世は色の旅、

妹背へだつる山々には、艶書の橋をわたし、戀の重荷に意馬を勞め、そつと忍んであいの宿。更行鐘にまつ並木あれば、取持手引の立場あり君をおもへば歩渡りの、浅い川なら膝までまくり深くなる程帯を解色慾國の二筋道木曾の掛橋ならなくに、命をからむ蔦かづらは、男女の痴情をいひたるならん欵。嗚呼、  
によつさりと辰の夏六  
妻戀淫士 慕々山人題◇

【口絵】

はづかしとありしをけして、我影にわかれて、君にあふそうれしき、 焉馬

○慕々山人腎水を減して枕草紙を綴る圖

枕草紙の作はなかく易くは出来ません。毎日鰻と玉子と猛丸を用ひなければ顎で蠅だて。

先生チト 仮宅へでもお出掛けなすつて一ト珍宝振出してから書かなけりやお体が続きますすめへ。

〔扁額〕「野〔慕〕庵」、〔本箱〕「枕文庫・淫本乱書・艶道通鑑・不器用又平畫帖」、〔掛軸〕「元祖不器用又平画」

※安政三年六月序。中本一冊草双紙体裁。板心「木曾」。山本本は八才「熊谷」まで存。完本は未見。白倉敬彦「絵入春画艶本目録」に拠れば「一妙開芳人画」。各宿場毎に一場面を設けた艶本の一形式である。道中物の木曾街道版。書誌事項未詳ながら翻刻本が存する（日文研）。また、福田和彦「枕旅木曾街道六十九次」（浮世絵グラフィック四・五、

KKベストセラーズ、一九九二年）に不完全ながら翻刻紹介がある。

◆ 仇戀 端唄の忍音

端唄十二景叙

春雨の爪弾、しつぽり濡る枝折となり、我物の小聲、置巨燵の指人形を導き雪巴の咽を聞せて、屏風が戀の仲立ちとなり、玉川の節をまはして水にさらせし、雪の肌を合すなんど、悉皆音曲の餘澤にして、鼻を鳴す唄女、泥水に住賣婦、いづれか端唄を好ざらん。されば小唄の徳には、たけき「倭婦の心をあぢにし、鬼の女房の鬼神さへ、ちよつと浮る、水調子。彼二上りの二世三世と、本調子の本音を出すも、所謂讀と歌澤なるべし」柳巷の裏河岸、情談泊に慕談の間、歌妓舎の端唄を、壁越しに聞ながら、塵紙に筆を染て、當即に題個は筆頭幫間

當垣慕文記「慕々」散人

※中本一冊。當垣慕文作、婦多川情水画。摺付表紙、見返、序の背景、口絵は色摺り。内題下「色念人娘壺述」、本文は中本型読本風で挿絵中にも本文が書き込まれている。

口絵第一図「淺草」、第二図「不忍」、第三図「向島」、第四図「亀戸」、第五図「高輪」、第六図「日本橋」、第七図「吉原」、第八図「芝居町」、第九図「愛宕」とあり、それぞれに「かふもり」「しのおこひぢ」「ひとよあくれば」「ひとこゑ」「ながきよ」「かつら川」「こひしく」「いろがある」など相応しい端唄が附されている。

内題「仇戀端唄の忍音」の脇に「色中の深情は別品の風味」とある。序文でも「古今集仮名序」を踏まえていたが、冒頭も「凡生としいけるものいづれか哥を好まざらん當時哥沢の流日にひにはびこり再々の新撰文句には鼻をならす朋女泥水に住賣婦等の意をとらかし鬼の女房の鬼神をもつまみ喰する好色者その名も女好とみづから号女と見れば手當り任せ誰でも戀の淫蕩放逸好こそ物の上手にて女たらしの物好……」とある。趣向としては、端唄本を沢山出している魯文の自家薬籠中のものであつた。

◆ 淫篇深閨梅前輯

深閨梅 自序

色づく梅の未開紅は、また手入らずの木娘にや。擬ふへく、氣を遣梅の枝ぶりは、によつきりとした勢ひあり。されば梅が香をさくらに移、柳の枝に咲せたらんは、吾妻女郎に長寄の、衣裳を着せ、花路の揚屋で遊べるに競へん。その情欲の栄花の夢に「肝膽くたく枕双昏は、花盗人の西啓が、一斯の觀樂一世の荒淫、外の色香を折とりて、金の瓶に手活の仇花、そが行ひもよしあしの、うめの難波の物語を、鎌倉山の星月夜に物うひ土筆のふでの先。暗記の儘なるあてがきにあつたら紙を費こと笑画の美女をながめて襷を穢す類ひに等し。しかはあれども此道の淫乱なるをいかにせん浴室を覗て流板をうらやみ、玉門嘗たし詠めたし」と、痴情を述る二本棒ならふ事なら夜の明ぬ國に生れていつまでもと思ひを吐だすしつ深も、情態都て相類じ嗚呼男根かしゃアがるとそゝろに微笑す

春心發動／得手物が辰のとし／によきく如月

小男鹿の／妻乞の溜土／ 慕々閑人漫記

◆ 溜篇深閨梅後輯

溜編深閨梅後輯序

梅花 開て春心を発し、黄鳥啼て艶情盛なり。されば年の内より春心で欺されて咲室の梅、忍びて一夜鶯宿梅、その香に暗を導て薫りゆかしき閨の梅、新鉢植をむざんにも手折は戀の花鋏莞尔梅が笑面を柳が招く好者の看官、去歳のつほみの封切を今年は開く深閨梅、第二輯次のむしかへし、諸冊の春画に魁して求めたまへとねがふになん

窓の梅か香を／硯の池にうつしとめて

乱亭のあるじ／ 慕々山人戯述◇

魯文の艶本

※中本二冊。序文から前輯は安政三年刊、後輯は四年刊。立命館ARC本二本（落丁や破損あり）も国文研本も一冊に合綴してあり、後輯の摺付表紙は未見。表紙と見返以外は墨摺で口絵を備える。本文は切附本風で挿絵中には仮名で書き入れがある。題名が「金瓶梅」をかすめているのは当然として、「溜編」が冠されていることから、馬琴の長編合巻「新編金瓶梅」（天保二、弘化四）を典拠としていることは容易に推測できる。その内容は「西門屋啓十郎」と溜婦「阿蓮」に月下菴の尼「妙潮」が配されて「武太郎」「妙汐」の殺害に及ぶ、さらに「阿蓮」は「秘事松」と通じて西門屋の財産を横領するが「武松」に復讐されるという筋立てに適宜濡れ場が書き込まれたものである。

啓十郎・阿蓮の淫蕩奸智に対して、武二郎・千早の正義貞節を対置するという勧善懲悪を踏まえた典拠を踏襲した構成になっている。また、「○浮吉が事此下に物語なし。そが行衛は本輯にくわしく説り」(後輯34ウ)などと読本めいた記述が見られるが、「本輯」が典拠である『新編金瓶梅』であることは書かれていない。つまり読者に典拠を秘匿する気は見られず、分かる人には分かるという書き方がされているのである。

◆於七封文戀情紋初編  
吉三封文戀情紋初編

封文戀情紋初編序詞

故を以て新に擬すは、四十嶋田の引眉毛。蛤の生たる蚶を、未新開の蛤と、一ぱい喰る籟ひにして、年々歳々春画帖の、著述相似たる男女の交合。再々念入れ工風を凝せど、こいつは妙開あら鉢だと、看官の喜悅趣向なければ、昔の戀の緋桜の、紅い二布の朱を奪ふて、今紫に潤色し、野暮な模様の煩多を刪、其情紋の簡要なる、肝文のみを残しとめ、彼古開を種として、八百家の娘の十六に角豆、寺の胡椒の生松茸を、喰ふてはじけし蚕豆の、新に縦る戀情本は、孩長一家の句調を鴈の、玉章と号封じ文。切なる戀の情紋と、おぼ束なくも呼子鳥。古今傳授の艶道秘事、和歌の三鳥和らぐ書の、縁因も「あれば三帖で、全部稿脱脚色にて、初編一冊翠簾昏へ、筆の胸中おし擱りて、ぐひくぐひとかくのごとし

外題に由縁の文月初旬／妻戀の淫宅に昼犯の間



※中本一冊。「女好楼画」（外題）。表紙・見返・序文の背景、口絵と挿絵との全てに色摺を施す極めて美麗な本。口絵第一図を左右と上に広げると口絵第二図が現れる。本文は中本型読本風で挿絵の中にも本文が入り込んでいる。敵役として高利貸「釜屋武兵衛」「油屋太佐兵衛」が登場し、「色情院小姓吉三郎」「八百屋於七」「下女於好」「鳶の者土佐工門傳吉」などが出てくるが、口絵に見られる「戸倉十内」「稲垣平馬」「吉三郎言号於雛」は初編には出て来ない。二編以下は未見。冒頭で、水茶屋の「おさせ」が「先刻貸本屋さんが封切だといって持て来ました封文」と題中本を讀でいたのでありますヨ」といつているのが興味深い。

◆鼠染春の色糸 初編

縮

夫色に種々あり。就中単色は五色の外の好みにして、亦天然の色なれば、三枝の札ある鳩羽単も、迷へば風に靡くてふ、柳単の秋さりて、散るはうたてき薄単、はじめはついた轉び寐に淺葱単と思ひしも、深くなるほど濃単、人目の閃を憚りて、互にしのび藍単、未はどうせう高野単と、はまり込だる瀬単、こ、らが色の要にて、彼豆盗児が烏闇に、無理往生の単鳴は、賽単の変色。是色本の外なるべし。遮莫とろぼうの泥に因田染も、色は単なれば、将天然の色といはん欵、噫、

丁巳年初春ころ満々たる溜水を墨汁石に滴して

暮朴齋述

(句読点を補った)

※中本三卷(三冊)。安政四年刊。国文研本は合一冊、替表紙。立命館A R C本は上巻、中巻四丁と中巻五丁、下巻に二分割し、袋と思しき表紙に改装されている。原表紙未見。「暮朴齋著」(内題下)、「又平画」(袋外題)。序以下、口絵や挿絵は全て墨摺。切附本風の本文で挿絵中にも本文が入り込んでいる。口絵中に「暮朴齋自題」として魯文作と思われる「月の単婚入するや齋薦」(二三絃をまくらにはなの木影かな)「我ものに折はうたてし梅の枝」の三句がある。本作が安政四年一月江戸市村座初演の黙阿弥作「鼠小紋東君新形」と密接な関係を持つてゐることは明らかである。実録に基づいたと記してはいるが、或いは芝居と同時期の出版を意図したのかも知れない。鼠色尽くしの戯文となつてゐる序文を一読しただけでも魯文の意気込の程が知れる。この初編の末尾に「扱単小僧は、最もきびしく獄中に繋き止られて刑罰せらるべきを、不測にのかれ命全く、再び江湖上に横行なし、松山と再會に及び、面白き実録の珍談あり。且、若草伊之助の事并に三浦兵部助、姪虚の物語は、第二編に説分るを愛看あらせ玉ひねかし」とあるが、第二編は未見。

◆戀の凄露の出島

戀のみなと、露の出しま序

踊に金を懸たる拍子利の嬢を馭手の附べき皆に逢はねば却て親にてんでこ舞をさせ大金を執る妾といへども孕こぢれる其時は思はぬ所へ縁につく斯れば生物に「かつえて張形に犯盛を過しむだな間に喰ひ飽て腎虚の先途を見届けぬも儘にならぬは浮世とはおまへと私が身の上と鹿罵なるうらなき戀も掌を握りて常陸帯も結ばず

陸奥に錦木もすたりて吸付煙草が媒すると聞時は戀哥一首をよむひまに尻を敲てすびきぬるこそ戀すてふ身の  
 譽ぞと又も入らざる御世話な度をスウ〜ハア〜と余慶な汗をかくこと爾り

とつて二度めのおつ立しまハ万作と〜しるき〜 ひつじの新板

當書山人「印」

※中本一冊。當書山人作、安政六年刊。仏国立図書館本は洋装に改装され他二本と合綴されている。摺付表紙と序文の背景と口絵八図に色摺が施され、挿絵中には草双紙風の書き入れがある。第一図「しきしま（上田島）」（書き入れ）「穴のなかハうづきにけりないたづらに、たゞくじりてもながれでしかな」とは本当の心意氣を詠んだな。「よの中にたえてしほ、のなかりせば、人の心ハたのしからまじ」、第二図「宝来島（やたらじま）」（この図は左右に開く折り込みで通常の見開きの倍）、第三図「湯島（大名しま）」、第四図「向嶋（五本手しま）」、第五図「佃島（関東じま）」、第六図「柳島（よこじま）」、第七図「八丈島（あるじま）」、第八図「三河島（立じま）」。

口絵とは無関係に思われる本文は、中本型読本風で挿絵なし。内題脇に「名代婢は娘の為に是ぞ出島の砂糖の甘み」とある。「深圖管」という醜男が、従弟の「出尾九次郎」という美男を代理にして、道具屋「助兵衛」の仲人によつて持参金付の嫁「させ子」を娶ることをめぐる話柄で、最後は夢落ちになっている。

◆ 春色港入婦寐 初編

しゆんしよくみなと いりふね  
 春色 港の入婦寐序

遠くて近きものおとこ女の道と。清少納言が云へりし如く。実恋々の情愛は。千里の海を隔とも。赤繩にひかる、碇綱。恋のみなとを目釣として。通ひくる輪の全盛を。一廣開飯盛が。杓子定規な筆頭に。摸しとりたる写真鏡。みな手にふれて港さきの世界を縮むる壺中の天地。晦日の月の別世界。看官疾々封切を。直々御覽あれかしと。一同よろしう願ふになん

阿奈垣のあるじ慕々山人記

※中本一冊(十五丁)。草双紙風摺付表紙、外題「春色港の入ふね」、大塚坊阿奈垣主人戯編、慕々山人序、一廣開飯盛(画)(序文に拠る。口絵第四図中の衝立にも「飯盛」とある)、安政頃カ。ホノルル美術館蔵本は、表紙・序の背景・口絵に色摺を用い、本文と挿絵は墨一色。見返一才に序文(慕々山人)、口絵は五図(第一図、第二図「フランス」、第三図「ラランダ」、第四図「エギ」リス、第五図「ナンキン」、本文十丁(予付ノド「いりふね一十」)。六図ある挿絵の周囲には本文(仮名漢字混じり)が入っている。本文の冒頭に「美代崎の歡喜樓に五ヶ國の大一坐」とあり、「女郎とネルトスル(西洋人)」、「女郎と南京の乱開好」の濡場を見た「昆崙坊」の「五人組」、異人の交合に刺戟されて「胡蝶(舞子)と千代元八代大夫」や「ずる吉(歌妓)と平助(若者)」等の濡場が描かれている。なお、初編以下は未見。

#### 四 結語

以上、不充分ながら魯文の艶本に関する基礎的な調査の報告を記してきた。しかし、未だに所在の知れない資料が存するし、古書目録で発見して注文したにもかかわらず入手出来なかった『春色優源氏』もある。そのような管見の範囲ではあるが、魯文の書いた艶本には明確な特徴が見られる。それは、何らかの有名なテキストを典拠として作り替えるという「抄録」という方法が用いられていることである。『南総里見八犬伝』『修紫田舎源氏』『絵本通俗三国志』『新編金瓶梅』などという長編を抄録するには才能が不可欠である。抄録家として自己規定してデビューした魯文にとつて、艶本は才能を発揮できる絶好のジャンルだったといひ得るだろう。ではあるが、艶本というジャンル故の陳腐化という課題もあつたわけで、『鼠染春の色糸』初編中巻七ウに次のように書き付けている。

作者曰、単小紋東君新形には、お高が置忘れし金包を与之助か拾ひとりて若菜屋へ届けしは、序幕に出て新助が百両かたり奪れしと同日の事なれども、本編には、新助がかたりにあひしより前の談とす。そもく、狂言の筋を假、人名を奪ふものから、趣向は大同小異あり。是、劇場の脚色と冊子譚とは、些用捨あるのみならず、況てか、る艶史なれば、筋違、且餘談多し。假令ば、若菜屋に下女ひとりて大家に似合ぬ無人なり。是は、ほかに婢はあれども、無用なれば出さぬも、舞臺の上でのみ見せる雑劇なれば事すめど、冊子にかゝる手落があらば、看官かならず打込んで作者が捧をくらふべし。ゆへに本編には、若菜屋に婢女三人ありとして、殊にお半を出ししは、漫りに綴る蛇足にあらず。単小僧生涯の実録に由らまく欲す。昔は二編の楔子のみ。

(句読点を補つた)

魯文が「淫本」<sup>いんほん</sup>「艶史」<sup>えんし</sup>や「戀情本」<sup>れんじやうほん</sup>と表記する艶本<sup>えほん</sup>は、所詮消費される商品としての戯作に過ぎない。しかし、この所謂「実用書」にも格が存在した。半紙本の『假枕浮名仇波』は装丁も、使われている色板の枚数も格段で、当然値段も潤筆（稿料）も高かったであろう。中本でも『封文戀情紋』などは全図に色摺を施しており、これも立派なものである。本稿では「中本型読本風」とか「切附本風」と記述したが、これも本文の一二あたりの行数や句読点の有無など、板面の格を表現したものである。精確な文字数を数えたわけではないが、途中に会話体を混えることが多い艶本の文体では、字数制限（丁数・冊数の制限）も抄録本として著述する上では大きな制約であったはずである。このような様々の板元からの要請に応じつつ、自らが書きたいように書くことは並大抵の仕事ではなかったと想像される。

ただし、誤解を恐れずにいえば、此処で艶本を書いていた魯文の〈文学性〉を問題にする必要などは決してないのである。十九世紀に於ける著述業の実態の解明にとって、魯文の仕事の調査は甚だ有用なデータを提供してくれるものと思われる。消費される〈文学〉の時代は、既に十九世紀に始まっていたのであるから、〈幕末開化期〉という呪縛から解放する有用で具体的な〈作家〉として、魯文は随一の存在なのである。

鈍亭時代の魯文が関わった艶本に関する基礎的な調査報告が可能になったのも、艶本が研究対象として正式に認知されつつある結果、国文研でも蒐集資料に加えられ、その所在情報が次第に明らかにされ始めたからである。日本における艶本研究は世界的に遅れをとってきたが、立命館大学アートリサーチセンターや日文研のウェブサイトで艶本を含む資料の画像データが公開されており、また早稲田大学図書館からも近世文学の、国立国会図書館からは近代文学の原本画像データが大量に公開されつつある。その一方で、二〇〇七～八年にフランス国立図書館が

開催した「禁書展」の図録が日本の関税を通らなかつた事件があつた。研究の水準と税関とは没交渉のようであるが、インターネットは国境を越えてしまうわけで、一次資料の画像データ公開は歓迎すべきことである。ただ、この公開が原資料に直接アクセスする必要のある研究者を、現物から遠ざけることにならないよう祈りたい。

【付記】本稿は国文学研究資料館で開催された「魯文プロジェクト」研究会での口頭発表に基づくものです。谷川恵一氏、青田寿美氏をはじめとして御示教賜つた方々に感謝致します。また、御架蔵資料を快く提供して下さつた山本和明氏、フランス国立図書館に資料の存することを御教示下さつた佐藤悟氏、その閲覧に際してお世話になつた小杉恵子氏、そして立命館大学アートリサーチセンターの赤間亮氏とホノルル美術館蔵リチャードレインコレクションについて御教示下さつた石上阿希氏にも心より感謝致します。

なお、本稿には所在情報を含めて今後の補訂が不可欠なので、是非とも大方の御批正御教示をお願いしたい。